

第3回「育て！プリントコミュニケーション」コンクール 入賞作品から ●よりよい通信をつくるヒント①

「手書き通信」の魅力と効用

かつては手書きでしか発行できなかった通信類も、現在では、その多くがパソコンで制作されています。第3回「育て！プリントコミュニケーション」コンクールの応募作品(470点)も、そのほとんどがパソコンによるものです。しかし、上位入賞作品35点を見てみると約3割(11点)が手書きによる作品でした。

手書きの文字やイラストは、温もりや味わいがあるだけでなく、「活字に慣れると逆に新鮮に見えるし、インパクトも強い」「読みやすく分かりやすい」など見直すべき点があるようです。そこで、今回は、「手書き通信」に注目してみました。

人間くささをそのまま伝える

今回、手書きの作品で最優秀賞に次ぐ優秀賞(全国新聞教育研究協議会賞)を受賞したのは、学級通信『富樫便』(酒田市立第四中学校)でした。制作者の富樫紀子先生は、第2回でも同じく手書きの作品で審査員奨励賞を受賞しています。

第2回の受賞の言葉で、

「手書きには手書きのよさがある」「うれしきときの字、悲しきときの字、怒っているときの字など、様々だった(と生徒は受けてとめている)」

と記しています。肉筆によるコミュニケーションで、いわば先生のナマの感情など、人間くささがそのまま伝わるといふことでしょうか。同様の意図を手書きに求める先生は多く、

●酒田市立第四中学校の学級通信『富樫便』(優秀賞)



●機械の文字よりも心が伝わる。先生らしい字ではない。…それが人間くさくていいのかも

●学級だより『ひとりみんなのために みんなはひとりのために』世田谷区立桜町小学校・岩田郷子先生

●手書きに「心」と「心」を大切にしたい思いが込められており、それが生徒に伝わっている

(保健だより『ハートもおしゃれ』大仙市立大曲中学校・富山和子先生)

●「手書き」であるということにこだわりがあります。(字が)下手でも、怒っていたり、うれしかったり、その時の感情を込めるといふこと。熱い思いを語るといふことです

(部活動便り『ラブ・オール』長岡市立秋葉中学校・水戸巖先生)

と、各先生が手書きを続ける理由を述べています。

思いついたままを自由に表現

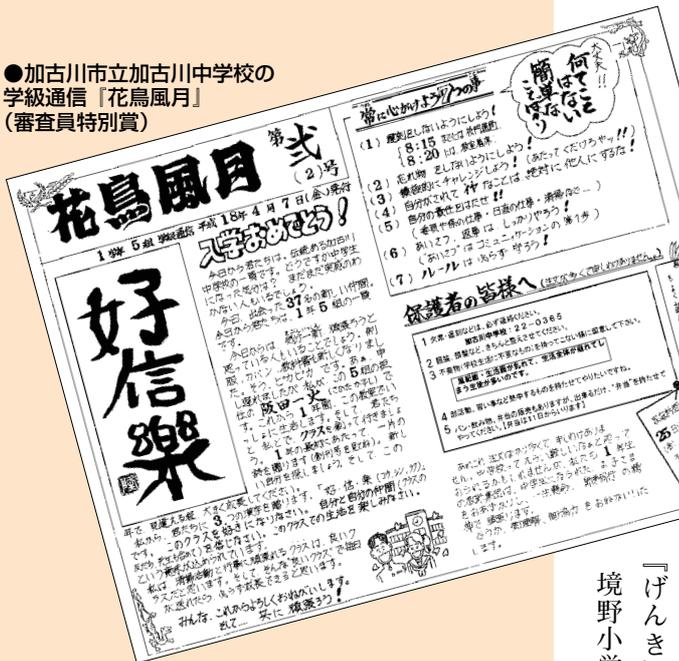
斜めの見出しを入れたり、欄外に書き込んだりと、紙面を自由に使うことができるのも手書きのメリットです。

学級だより『大好き』(草津市立高穂中

PRESENT 文中で紹介した全作品をはじめ、入賞作品35点と活動報告、講評などを掲載した入賞作品集（A4判・88頁）をご希望の先生方にさしあげます。お申し込みは財団ホームページ（<http://www.riso-ef.or.jp>）から。また、同ホームページの「通信なんでも相談室」（第13回「手書きか？パソコン制作か？Web通信か？」他）もあわせてご覧ください。



●草津市立高穂中学校の学級だより『大好き』（審査員特別賞）



●加古川市立加古川中学校の学級通信『花鳥風月』（審査員特別賞）



●たつの市立越部小学校の校報『城の山』（優良賞）

学校）はまさにその好例で、小林浩美先生はのびのびと限られたスペースを活用し、楽しみながら作っている感じを受けます。

学級通信『みんな主人公23』（宇治市立西宇治中学校）も同じで、林原茂先生は自作の漫画を載せて、楽しい雰囲気をもし出しています。「もし絵が苦手な先生は、生徒に描いてもらって載せるだけでも紙面はがらりと変わります」と、林原先生はカットや漫画の効用を説いています。

かつてはパソコンで作っていて手書きに変えたのは学級通信『やさしい子』（岡

崎市立六ツ美南部小学校）の稲垣たかみ先生です。パソコンだと立ち上げに時間がかかったりして気持ちが悪くなるので、現在は、「その時々」感じたことをそのまま文にすることを優先しています」とのこと。

パソコンとの併用も効果

パソコンと手書きの併用で、紙面に変化やメリハリを上手に出している通信もあります。

『花鳥風月』（加古川市立加古川中学校・阪田一史先生）や学級通信『げんき』（桐生市立境野小学校・武井美

佳先生）などがそれです。英語科通信『Sailing-on』（白山市立鶴来中学校）では、とかくスペースがとられがちになる手書きの欠点を「多くの英文を読ませたいと思うときにはパソコンで打ち直す」（北光代先生）ことで解消しています。

最後に触れておきたいのは、審査員の吉成勝好先生をして「よい仕事をしていきますねと言いたくなる」と「感嘆」させた校報『城の山』（たつの市立越部小学校）です。

田中一典先生は、教職35年間、ガリ版以来の手書き通信発行で、『初心』を忘れないために手書きを続けていると言います。「紙面も内容もオーソドックスで、安定した情報提供になっている」（吉成勝好先生）との評価でした。

※学校名は応募時点のものです。

※本文中の先生のコメントは、「育て！プリントコミュニケーション」コンクール 入賞作品集から抜粋しました。